

スポーツ選手のライフスキル教育の必要性

鳥羽賢二¹⁾

Necessity of Life Skill Programs for the Athlete

Kenji TORIBA

Key words : ライフスキル教育, スポーツ選手, 人格陶冶機能

1. ライフスキルの定義

1993年に国際連合の専門機関である世界保健機関 (WHO) では、保健衛生の観点から健康的に日常生活を送るために必要なスキルとしてライフスキルが提示されている¹⁾。ライフスキルとは、「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な心理社会能力」と定義される。また、学術的なライフスキルの解釈は、コーネル大学のBotvin²⁾による「複雑で困難な課題に満ちた社会の中で成功し、直面する多くの問題を効果的に取り扱うのに必要とされる一般的な個人および社会的能力」とされる。

図1に示したようにWHOは、10個の要素から5つのライフスキルを構成している。これらは、人間としての精神的な成長と社会性を促す幅広い諸スキルの総称と捉えられる。具体的には、社会環境の変容にともなう外的な要因や生活習慣上とも関わりの深い「薬物使用、未成年者の飲酒や喫煙、いじめ」等に対応する課題や、「思春期妊娠、エイズ」等のヘルスプロモーション、あるいは「知的能力の向上」といったものへの対応が中心となっている。

ライフスキル教育の理論的背景には、ライフスキルは学習によって獲得可能であるという考え方があり、Banduraによる社会的学習理論³⁾に基づくとされる。これは、日常生活への不適応や問題行動の原因をパーソナリティーや環境に求めるのではなく、個人の能力やスキルの欠如として捉え、教示やモデリン



図1 WHOによるライフスキルの要素

グ、フィードバックといった方法によって学習できるとしている。

2. アメリカとわが国のライフスキル教育

1980年代のアメリカで、大学スポーツ選手が直面する様々な問題の解決法として、ライフスキルプログラムが考案された。当時のアメリカの社会状況は、経済が低迷し治安も悪化し、行きすぎた個人主義によりコミュニティが崩壊し、ソーシャルキャピタル (社会関係資本) が減退しつつあった。

この時期に、スポーツ界で多くの問題が発生している。例えば、スタジアムのロッカールームでの発砲事件、選手間のドラッグの蔓延、大学付近の治安の悪化、スポーツ推薦で入学した学生が学業についていけない等荒廃した状況となっていた。このような単なるスポーツ選手の問題だけではなく、大学教育全体のレベル低下が国力の低下にもつながる危機とも認識され、ライフスキル教育への機運

1) 競技スポーツ学科

が高まったとされる。

一方、近年わが国においても当時のアメリカに似た社会的背景があり、WHOのライフスキル同様、表1にまとめたような人間形成への取組みが、各省庁にから提唱されている。

表1 各機関の人間形成への取組み

機関	能力要素	主な内容
WHO (1993)	ライフスキル	効果的コミュニケーション・対人関係・共感性
文部科学省 (2004)	生きる力	協調性・責任感・人間関係形成力・感性・表現力
経済産業省 (2006)	社会人基礎能力	発信力・傾聴力・柔軟性・情報把握力・規律性
厚生労働省 (2006)	就職基礎能力	コミュニケーション能力・意志疎通・協調性・自己表現力
内閣府 経済高成長会議 (2006)	人間力	コミュニケーションスキル・リーダーシップ・公共心

各機関ホームページに基づき筆者作成

3. 近年のわが国のスポーツ界事情

スポーツが教育の一環として採用され、定着している日本においてもスポーツ選手による不祥事（モラル欠如）が多発している。例えば、大学のスポーツ選手による集団暴行事件やスポーツ推薦の留年者の問題等である。また、社会人ラグビー選手や大相撲界のドラッグ所持等、スポーツ選手が関係する社会的問題は数多い。

一般的な大学では、スポーツの本質や競技を通してどのような人材を育成するかに関わるような議論等が不活発であり、スポーツの技術のみを高め広告塔としての役割さえ全うすれば良いとされるような風潮さえある。こうした事情が、諸問題の引き金になっていると考えられる。日本で唯一、校名にスポーツを冠した本学においては、そのようなことは断じて許されないことになる。

一番重要な理由は、本来スポーツには「生きる力」や「人間の力」を育むといった全人的な教育機能が備わっているからである。近代スポーツの源であるイギリスのパブリックスクールでは、スポーツは、人格を陶冶するための重要な教育手段として、その目的があり、身体を鍛えるのみで行われたものではなかった。そのような意味も含めて、昨今のスポーツ選手による不祥事の頻発を見ると、ス

ポーツは、その全人的な教育機能を発揮しているとは言い難い。

4. ライフスキル教育の必要性

では、その問題の所在はどこにあるのであろうか。スポーツの価値を生かしきれない社会的システムと、スポーツに関与している人間のモラルが欠如していることにあろう。かつての「スポーツは、清く、正しく、美しい」といった牧歌的なスローガンを啓発したところで、その理想の具現化は難しい。そこで、スポーツが包含している人格陶冶機能を発揮するための時代にマッチしたプログラムが必要となっているのである。

つまり、それは、ライフスキル教育が1つの具体的候補となっていると示唆するものであり、その成功はアメリカのみでなく、わが国においてもその事例が既に存在している。

スポーツの語源はラテン語の「デポルターレ」。これは、「不安を取り除く」という意味を持っている。近代社会において様々な諸問題を取り除くには、スポーツが有効な装置となり得ると考えられる。そのためには、スポーツ選手がライフスキルを身につけ、社会のロールモデルになっていなくてはならない。

- 1) ライフスキルは、WHOにより定義され UNESCOやUNISEFは、その定義を採用している。
- 2) Botvin Life Skills Training
ホームページ <http://www.lifeskillstraining.com/index.php>
- 3) 社会的学習理論 (social learning theory) は、行動主義的な連合学習 (ロールプレイと強化子による学習) とは異なる「モデリング (他者の行動の観察) による学習」のこと。学習心理学、行動科学 (行動主義心理学) における社会的学習 (social learning) という概念には、「社会的環境における学習」という意味と「社会的行動の学習」という意味とがある。Banduraの社会的学習という場合には、他者の行動や態度を観察する社会的環境 (場面) での学習という意味が含まれている。

参考文献

- 1) 横山勝彦・来田宣幸 (1997) 「ライフスキル教育—スポーツを通して伝える生きる力—」昭和堂